

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

科学か，非科学か：文化人類学における比較の歴史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 博之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001073

科学か，非科学か

— 文化人類学における比較の歴史 —

栗田 博之

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

1 はじめに

比較作業とは、一見すると、比較の対象の違いを浮き彫りにする作業に見える。例えば、日本人とアメリカ人を比較するという場合には、両者の違いを際立たせるかたちで比較作業がおこなわれるのが通例である。しかし、それでは両者はまったく異なっているのかといえ、じつのところ、両者に共通する部分は数多く存在する。実際、日本人とニホンザルとに共通する部分のほうが、日本人とアメリカ人とに共通する部分よりも多いと主張する者はほとんどいないであろう。人間は文化という可塑性に富んだものを自在に扱うことができるようになり、文化の違いは生物種間の違いに匹敵するのだという主張は明らかに誇張なのである。差異を強調しようとする者は共通性を過小評価し、共通性を強調しようとする者は差異を過小評価する。この点を考慮に入れなければ、比較作業の本来の意味は見失われてしまうであろう。比較は共通する部分が存在する、あるいは、共通する部分を見出すことができるという前提のうえで、差異を問題にする作業なのである。

文化人類学は、その出発点において、人間文化の共通性（人間の心的斉一性）を前提に置いて研究に着手した。多様な文化を同一平面上で比較するという作業を学問の世界に持ち込んだのである。この点は十分に高く評価しなければならない。しかし、19世紀の進化主義人類学者たちが、当時入手可能だった資料にもとづきさまざまな文化を比較してどちらがより進化しているかを判断するという形で比較作業を進めたために、進化という同一直線上（単系進化）での前後関係ばかりが注目され、「比較は文化の進化の度合いを測定するための作業」というイメージが強く焼きついてしまった。そのため、19世紀進化主義人類学を徹底的に批判した20世紀以降の人類学において、比較という言葉はあまり評判がよくない。しかも、進化の基準が恣意的なものであり、西欧中心主義にとらわれた憶測にすぎず、「非科学的」とであると批判されたために、「比較は科学的におこなわなければならない」という強迫観念が生まれてしまったのである。

また、19世紀進化主義人類学は文化をさまざまな要素に分解して、それぞれの要素ごとに比較をおこなうという方法を採用したが、20世紀の人類学はこれを要素主義と批判して、文化の体系性を重視し、文化の要素間の連関を明らかにしようとした。19世紀の

非科学的で要素主義的な比較研究をいかに乗り越えるか、これが比較研究を標榜する20世紀の人類学者の大きな課題となったのである。

2 ホワイトの普遍進化論

反進化主義が主流を占める20世紀人類学のなかで、アメリカの人類学者レスリー・ホワイトは文化の進化を比較研究によって明らかにしようとした数少ない人類学者のひとりである。すでに明らかにされていた19世紀進化主義人類学の欠点を克服して、文化の進化を科学的に解明することをホワイトはめざした。

まず第1に、要素間の連関の問題である。ホワイトは文化システムを「テクノロジー、社会、イデオロギー、情緒」という4つの構成要素に分け、それぞれが動的にみれば相互に緊密に連関しあっているとした。そして、その連関の中で、テクノロジーのみが独立変数であり、他の3つの要素は従属変数にすぎないと主張した。すなわち、社会、イデオロギー、情緒はテクノロジーによって決定されると考えたわけである。そして、もしそうであるとすれば、テクノロジーという文化の最終決定要因を比較することによって、文化の進化の過程を明らかにすることができる。

しかし、科学的・客観的にテクノロジーという独立変数を比較しなければならない。これが第2の問題である。この問題に対する答として、ホワイトはテクノロジーを数値化して、科学的に比較する方法を考案した。すなわち、年間1人あたりの補足エネルギーの量とそれをを用いるテクノロジーの積を算出して、その数値を比較するのである。そして、このような比較作業を積み重ねていき、ホワイトは文化に関する一般法則、「積が増大する方向に文化は進化する」を定立するにいたった。これは一般に「普遍進化論」として知られている。

ホワイトの主張は非常に単純な還元論にもとづいている。ホワイトの立場からすれば、文化はすべてテクノロジーに還元されるはずである。しかし、残念なことに、テクノロジーが文化の他の構成要素を決定していることが科学的に証明されたわけではない。ホワイトはこれが民族誌的資料から帰納的に導かれた結論であるとしているが、演繹的な推論にすぎないのは明らかである。ホワイトの立場を批判的に継承していった人類学者たちは、より精緻なデータの数値化をめざして、定量的な調査にもとづく生態人類学という分野を確立していった。

これにともない、主要な研究テーマは「進化」から「適応」に移っていったが、生態人類学者の議論はしばしば還元論として批判され、「社会構造」還元論の立場をとったイギリスの人類学者ラドクリフ＝ブラウンとその弟子たちの「機能主義」的な立場と同類のものとして、「新機能主義」と揶揄されることになった。ホワイト流の還元論は科学的な比較研究の可能性を示すことに一部成功したが、要素間の連関を解明することに失敗

し、結果的に、文化の比較の科学としてではなく、文化的な適応の科学としての生態人類学にその欠点も含めて受け継がれていくことになったのである。

3 マードックの通文化的比較

ホワイトのように還元論に陥ることなく、文化の要素間の連関を明らかにするためには、まったく別の方法論が必要となる。アメリカの人類学者ジョージ・P・マードックは統計学的手法に着目した。ホワイトのように、どの要素が従属変数であり、どの要素が独立変数であるかを演繹的に推論するのではなく、民族誌的資料を統計的に処理し、帰納的に推論するという研究方法を導入したのである。

この方法を用いるためには、膨大な民族誌的資料の蓄積が必要となる。しかも、すべて同一の文化要素の分類に従ってデータは収集されなければならない。そのため、マードックはHRAF (Human Relations Area Files) と呼ばれる民族誌データベースの開発に着手した。このデータベースをもとに文化の要素間の連関を発見しようというわけである。実際には、文化の要素間にどのような相関関係があるかを示す相関表を作り、検定という手続きを経て、その相関が有意であるか、有意でないかを判定し、有意であれば、そこに何らかの機能的な連関があると推定することになる。これは現在さまざまな学問分野で盛んに用いられている標準的な統計処理の手法であり、マードックはこの手法を用いた自らの研究方法を「通文化的比較」と名づけた。現在では、HRAFのデータベースをコンピュータによって高速に処理することも可能である。

マードックはこの手法を社会構造の比較研究に用いた。研究対象を社会構造に限定することによって、変数の数が少なくなり、統計的な相関関係の発見が容易になるのである。そして、民族誌データの分析の結果、社会に外在するある要因（独立変数）に対する適応の過程として、居住規制が第1の従属変数となり、居住規制に従属する変数として出自・婚姻規制があり、さらにそれに従属する変数として親族名称があるという結論を導き出した。

マードックは、さらに、このような機能的連関は文化の歴史＝進化の過程で産出されたものであると主張する。統計的な処理によって、歴史＝進化の過程が明らかにされたのであろうか？ 残念ながら、そうではない。要素間に有意な相関関係が発見された場合、どの要素を独立変数ととり、どの要素を従属変数ととるか、その機能的連関がどのようなものであると推定するかは、データの統計的な処理とはまったく別個の問題であり、研究者自身が演繹的に推定するほかないのである。そして、歴史＝進化という通時的な立場に立ったマードックの社会構造に関する演繹的な推定は、結局のところ、還元論的な説明に陥ってしまい、共時的な研究を目指す大多数の人類学者達から妥当性を欠くものと判断されて、厳しい批判にさらされた。その結果、マードック流の通文化的比

較が人類学の標準的な研究方法として定着することはなかったのである。

4 ベネディクトとミードの文化相対主義

ホワイトやマードックは自然科学的な厳密さを追究しながら比較研究を進めていったが、その研究方法・研究成果の評価はあまり高くない。これに対し、より人文科学的な色彩の濃い比較研究を進めたルース・ベネディクトやマーガレット・ミードの業績は一般に広く知られており、人類学の世界においても強い影響力を保ち続けてきた。このような違いが生まれた主な原因は、文化の差異をそれぞれがどのように評価したかという点にあるように思われる。ホワイトやマードックは何らかの独立変数を見出して、文化のさまざまな要素を科学的に説明することに重点を置いたが、文化の差異はその独立変数の差異に還元されるものとなってしまう、結果的に、文化の差異を過小評価することにつながってしまった。一方、文化相対主義を標榜するベネディクトやミードは文化の全体性を強調し、差異をそのまま差異として扱う。そして、還元論的な立場に立つことを回避することにより、文化の差異を十分に、そして時には過大に、評価することができた。そこで、今度は文化相対主義の立場からの比較作業がどのように行われたのかを見ていくことにしよう。

ベネディクトは、その著書『文化の型』（1934年）において、アメリカの先住民であるズニとクワキウトゥル、ニューギニアのドブ島民という3つの社会をとり上げ、それぞれの文化の型（pattern）を比較した。ベネディクトの関心は、文化の個々の要素間の連関にではなく、その連関を支配する文化の統合様式（configuration）にあった。そして、ズニの文化をアポロ型、クワキウトゥルの文化をディオニソス型、ドブの文化をパラノイア型と呼んで、それぞれの文化の方向づけの違いを強調した。このアポロ型・ディオニソス型という表現が示すように、ベネディクトが文化の型、文化の統合様式、文化の方向づけなどと呼んだものは、文化の中に生きる個人の行動特性を類型化して語ったものであり、のちの「文化とパーソナリティ」派が主要なテーマとしてとり上げた、文化による個人の行動のパターン化の問題に対するベネディクトの関心の深さがうかがえる。

しかし、このような文化の型がどのように形成されたかという点に関してベネディクトは多くを語らず、伝播も含めた歴史的過程に言及するだけである。逆に、歴史的に形成されたと述べることによって、還元論的な立場とは相容れない文化相対主義を強く主張することができるのである。この点は、次のミードの場合にも共通している。

ミードは、その著書『三つの未開社会における性と気質』（1935年）において、自ら調査したニューギニアの3つの社会、アラベシュ、ムンドゥグモル、チャンブリを比較して、それぞれの文化において男女の気質に大きな違いがみられることを明らかにした。アラベシュでは男女とも「女性的」、ムンドゥグモルでは男女とも「男性的」、チャンブ

りでは男は「女性的」で女が「男性的」という、好対照をなしているのである。この事実によって、男女の気質の違いは男女の生物学的な性差にもとづくものであるという従来の一般的な考え方は否定されることになった。

また、ベネディクトは遠く地理的に隔たった3つの社会を比較したが、ミードが比較した3つの社会はセピック河流域にあって互いに近接しており、多くの文化的特性を共有している。したがって、これら3つの社会の男女の気質の違いは歴史や生態といった他の変数にも還元することができない。

こうして、男女の気質の違いは純粋に文化の違いであることがミードによって鮮やかに示されたわけである。その後ミードは、セピック地域のほかに、自らフィールドワークをおこなったサモア、マヌス、バリの事例を加え、アメリカと比較するという手法で、パーソナリティと社会化の過程の連関を分析し、『男性と女性』を著した。近接した3つの社会の比較という研究成果を発展させて、遠く離れた社会をも比較するわけであるから、ミードの研究はベネディクトに比べはるかに説得的であったといえよう。実際、これらミードの文化相対主義的研究は後のジェンダー論の道筋をひらいたという点で高く評価されている。

しかしながら、これらの文化相対主義的な研究は、文化の差異を何ものにも還元することなく、ただ単に個々の文化の独自性ばかりを強調するために、「文化が違うから違う」というトートロジーに陥ってしまう。性差に関する生物学的還元論を否定したミードのように、還元論と闘ううえではこの「文化が違うから違う」というトートロジーも一定の役割を果たすことができたが、残念ながらその先には何も残されていない。逆に、個々の文化の独自性を強調したいがために、文化の型とか気質といった個々の文化要素を超越したレベルに問題を限定し、その差異を誇大に強調したのではないかという疑いが出てくるのである。実際、ベネディクトやミードの研究に対し、当初から印象主義的であるとの批判がくり返されてきたし、その実証性にも以前から疑問符が付されてきた。さらに、近年では、相対主義的文化決定論は単なるイデオロギーにすぎないのではないかという、文化相対主義のイデオロギー自体が問題にされるようになってきている。ミードの研究に対する反フェミニズム運動からの批判はまさにこの点を突いているのである。文化相対主義は「文化が違うから違う」というトートロジーを内包しているがために、人を魅了する力を持つと同時に、非常に打たれ弱いものなのである。

その後「文化とパーソナリティ」派の人類学者達は、以上のような批判を意識して、研究の客観性・実証性を高める方向に向かっていった。例えば、「文化とパーソナリティ」を項目化していき、マニュアル化された調査方法を用いて、一定のフォーマットにもとづいた民族誌データを集積し、それを比較するという方法が構想され、一部実施に移されたのである。また、ミードも文化の違いは子供の育て方の違いによって生じるのではないかと考え、育児様式を文化内の独立変数として位置づけるような方向性を打ち

出していった。

こうして、ベネディクトやミードの文化相対主義的研究は次第に自然科学的な厳密さを追究する方向にとって代われ、それとともに、人文科学的な魅力を失っていくことになってしまったのである。

5 比較という不可能な作業

くり返しになるが、冒頭で述べたように、比較作業とは、共通する部分が存在する、あるいは、共通する部分を見いだすことができるという前提のうえで、差異を問題にする作業である。共通する部分（変数）が多ければ多いほど、違っていている部分（変数）を比較することは容易である。逆にいえば、共通する部分が少なければ少ないほど、違っていている部分の比較作業は困難となる。実験室的な状況であれば、研究者は変数を統制して（共通部分を広げていって）、差異に関与すると思われる変数を限定していくことができる。実験科学と呼ばれる手法はこのような比較作業によって多大なる成果を挙げてきた。しかし、人類学を含め、人文・社会科学の分野では、一般に実験室的な状況を作り出すことができない。そのため、狭義の経験科学として、現象が生起する状況を研究者が統制することなく、事後の世界のみを相手にすることになる。当然、比較作業は困難なものとならざるをえない。

かつて、人類は世界中に広がるなかで、発明や借用という手段によってさまざまな試行錯誤をくり返しなが、多様な文化を作り上げてきたのであるから、人類は壮大なる文化的実験をおこなっているのだと考え、フィールドを「生きた実験室」とみなすという考え方があった。しかし、「実験室」といいながら、実際には変数はまったく統制されていないのである。やはり困難な比較作業に立ち向かうほかないのである。

しかし、変数を人為的に統制する可能性がまったくないわけではない。ひとつは、マードックがおこなったように、比較する領域を社会構造なら社会構造、宗教なら宗教といったように限定することで、変数を限定してしまう方法である。今日人類学的比較研究がこのような方法をしばしば採用しているが、決まって出てくるのは、個々の文化・社会的脈絡を無視しているという批判である。もうひとつは、ミードがニューギニアでおこなったように、文化的な共通性を前提に比較作業がおこなえるよう、地域的な限定を加えることによって、変数を限定してしまうという方法である。これもしばしば用いられる方法であるが、局所的な比較として、単なる地域研究にすぎないと批判されてしまうであろう。いずれにしろ、変数を統制した比較によって、新たな発見がもたらされると期待することはできない。

それでは、演繹的に還元論を押しとおす（差異性を共通性で理解する）か、相対主義のトートロジーを受け入れる（差異性を差異性で理解する）か、このどちらかしか比較

研究の向かう道はないのであろうか？ 前者であれば、科学的な厳密さは満足いくものとなるかもしれないが、文化の独自性が過小評価されてしまう。後者であれば、文化の独自性は十分に評価されるが、科学的な厳密さを犠牲にしなければならない。イギリスの社会人類学者エヴァンズ＝プリチャードがかつて「社会人類学の唯一の方法は比較である。そしてそれは不可能である」と述べたように、どちらの道も所詮は先のない道を目指しているのであろう。近年の人類学では、比較の単位となるはずの文化の概念自体が疑われ、文化の個々の要素が通文化的に比較可能なものとして同定できるのかも問題視されている。比較研究の基盤自体が疑われているのである。このようななかで、比較研究の将来は暗いものとししか映らないかもしれない。しかし、文化人類学の根本を支えているのは比較という作業であるという点は依然として変わらないし、文化人類学者は文化の共通性と差異性を問題にし続けなければならない。結局のところ、文化人類学は比較という不可能な道を歩むほかないのである。